大齋期の時課

注意 譜面中、五線譜上に © とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞(祈祷文)が 持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読み になってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

【 第三時課 (第一時課から続く時は2ページの【 常例の聖詠 】から)

司祭) 我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、

誦經)アミン。

われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き 我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 は 父 と子と 聖 神 に歸す、今 も何時も世世に。アミン。

Ltviさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎょ しゅさい われら あやまち ゆる 至聖三者よ、我等を 憐 め。主よ、我等の罪を 潔 くせよ。主 宰よ、我等の 愆 を赦せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よせ。 聖なる者よ、臨みて我等の 病 を癒し給え。 悉 く 爾 の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ 主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 は 父 と子と 聖 神 に歸す、今 も何時も世世に。アミン。

てんいますわれらっちちょ、ねがわくなんちの名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等においめものもれらゆる。こと、おれらおいめかる。まいめかる者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我等を凶惡より救い給え。

けだし くに けんのう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ 司祭) 蓋、國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

誦經)アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ き 憐 めよ、主 憐 めよ、

【常例の聖詠】

きた われら おう かみ こうはい **來れ、我等の王・神に叩 拜せん。**

^{きた} われら おう かみ こうはいふふく **來れ、ハリストス・我等の王 ・神に叩 拜俯伏せん。**

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく 水れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩 拜俯伏せん。

【 第16聖詠 】

しゅ われ なおき き われ よ き い いつわり くち い いのり う たま ねが 主よ、我の 直 を聽き、我の呼ぶを聆き納れ、 偽 なき口より出づる 禱 を受け給え。願 われ ただ さばき なんぢ かんばせ い なんぢ め ぎ そそ なんぢ すで わ こころ わくは我を糺す 判 は、爾 の 顔 より出で、爾 の目は義に注がん。爾 は已に我が 心 ため、やちゅうのぞっわれ、こころ、えいところ、おいくち、われいおもいにない。ひといしわざを驗し、夜中に臨み我を試みて得たる所なし、我が口は我の思に離れず。人の行爲 おい われなんぢ くち ことば したが はくがいしゃ みち つつし わ あゆみ なんぢ みち に於ては、我 爾 が口の 言 に 循 いて、迫 害 者の途を 慎 めり。我が 歩 を 爾 の路に かた わ あし つまづ ため かみ われなんぢ よ けだしなんぢわれ き なんぢ 固めよ、我が足の 蹶 かざらん為なり。神よ、我 爾 に籲ぶ、 蓋 爾 我に聽かん。 爾 の みみ われ かたぶ た ことば き たま なんぢ たの もの なんぢ みぎ て てき もの すく **耳を我に 傾 けて、我が 言 を聽き給え。爾 を賴む者を 爾 の右の手に敵する者より救** しゅ なんぢ たえ あわれみ あらわ たま われ ひとみ ごと まも なんぢ つばさ かげ もつ う主よ、爾 の妙なる 憐 を 顯 し給え。我を眸子の如く護れ、爾 が 翼 の蔭を以て、 われ せ ふけんしゃ おもて われ めぐ わ たましい てき われ おお たま かれら おのれ あぶら 我を攻むる不虔者の 面、我を環る我が 靈 の敵より我を覆い給え。彼等は 己 の 脂 つつ **のれ くち たか い いまわ あゆ たび われら めぐ め ねら ち たお に 包 まれ 己 の口にて高ぶり言う。今我が歩む度に我等を環り、目に狙いて、地に顚さ ほつ かれら えもの むさぼ しし ごと ひそか ところ うづくま こじし ごと しゅ おんと欲す。彼等は獲物を 貪 る獅の如く、隱 なる 處 に 蹲 る小獅の如し。主よ、起き かれら さき かれら たお なんぢ つるぎ もつ わ たましい ふけんしゃ すく しゅ よ、彼等に先だちて彼等を殪し、爾の劍を以て我が靈 を不虔者より救え。主よ、 ぱんぢ て もつ ひと すなわちよ ひと すく たま かれら ぎょう こんせい なんぢ なんぢ **爾 の手を以て人、 卽 世の人より救い給え。彼等の 業 は今 生にあり、 爾 は 爾 の** ほうぞう そのはら み かれら こ あ あまり そのすえ のこ ただわれ ぎ もつ なんぢ 寶 藏より其 腹を充たし、彼等の子は饜きて 餘 を其 裔に残さん。惟 我は義を以て 爾 の ^{んばせ み さ お なんぢ かたち もつ みづか あ た 顔 **を見んとす、覺め起きて 爾 の 容 を以て 自 ら饜き足らん。**}

【 第24聖詠 】

しゅ なんぢ わ たましい あ わ かみ なんぢ たの われ よよはぢ た でき 主 よ、 爾 に我が 靈 を擧ぐ。 吾が 神 よ、 爾 を 恃 む、我 に世世 愧 なからしめよ、我が 敵 たま なか はら はしむる 母れ。 凡 そ 爾 を 恃 む 者 に も 愧 なからしめ 給 え、 妄 に 法 を 犯 もの ねが はぢ え しゅ われ なんぢ みち しめ われ なんぢ みち おし われ なんだ す者は願わくは愧を得ん。主よ、我に 爾 の道を示し、我に 爾 の道を訓えよ。我を 爾 しんり みちび われ おし たま けだしなんぢ わ すくい かみ われひび なんぢ たの の眞理に 導 きて、我 を 訓 え 給 え、 蓋 爾 は我が 救 の 神 なり、我 日日に 爾 を 恃 めり。 しゅ なんぢ めぐみ なんぢ あわれみ きおく けだしこ えいえん わ わか とき 主 よ、 爾 の鴻恩と 爾 の慈 憐とを記憶せよ、 蓋 是れ永 遠よりあるなり。我が少き時の っみ あやまち きおく なか しゅ なんぢ いつくしみ よ なんぢ あわれみ もつ われ きおく 罪と 過 とを記憶する毋れ、主よ、爾の仁慈に依り、爾の慈憐を以て、我を記憶 しゅ じん ぎ ゆえ ざいにん みち おし しめ けんそん もの ぎ みちび けんそん せよ。主は仁なり、義なり、故に罪 人に道を訓え示す、謙 遜の者を義に 導 き、謙 遜 もの おのれ みち おし およ しゅ みち そのやく そのけいし まも もの あ じれん の者に 己 の道を教う。凡そ主の道は其 約と其啓示とを守る者に在りて慈憐なり、 しんじつ しゅ なんぢ な よ わ つみ ゆる たま そのおおい もつ だれ しゅ おそ 眞 實 なり。主 よ 爾 の名に因りて我が罪 を 赦 し給 え、其 大 なるを 以 てなり。誰 か 主 を 畏 ひと しゅ これ えら みち しめ かれ たましい ふく お かれ すえ ち つ **るる人たる、主は之に擇ぶべき道を示さん。彼の** 靈 は福に居り、彼の裔は地を嗣がん。 しゅ おうぎ かれ おそ もの ぞく かれ そのやく もつ これ あらわ わ めつね しゅ あお 主の奥義は彼を畏るる者に屬し、彼は其 約を以て之に 顯 す。我が目常に主を仰ぐ、 そのわっあし あみ いだ よ われ かえり われ あわれ われひとり くるし よ 其我が足を網より出すに因る。我を 顧 み、我を 憐 め、我 獨 にして 苦 めらるるに因る。 わ こころ うれいますますおお わ くなん われ ひ いだ わ くるしみ わ つかれ かえり わ 我が 心 の 憂 益 多し、我が苦難より我を引き出せ、我が困 苦、我が勞瘁を 顧 み、我 たましい まも しわれ すく たんち お たのみ はち たま ねが むてん き。我が 靈 を護りて我を救い、我が 爾 に於ける 恃 に愧なからしめ給え。願わくは無玷 ぎ われ まも われなんぢ たの かみ そのもろもろ うれい すく たまと義とは我を護らん、我 爾 を恃めばなり。神よ、イズライリを其 諸 の 憂 より救い給 え。

【 第50聖詠 】

かみ なんぢ の 大 なる 憐 に因りて我を 憐 み、爾 が 惠 の多きに因りて我の不法を抹したま。 しばしばわれ わ かほう よほう しかい、我を我が罪より清め給え、 蓋 我は我が不法を知る、我の罪は常に我が前に在り。我は 爾 獨 爾 に罪を犯し、惡を 爾 の目の前に 行えり、爾 は 爾 の審 斷に義にして、爾 の裁 判に 公 なり。視よ、我は不法に於て妊まれ、我が母は罪に於て我を生めり。視よ、爾 は 心 に真 實のあるを愛し、我が衷に於て

プライスマ 【 指定された坐誦經(通常は省略) 】

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ 主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、





かみ いさぎよき こころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま 可祭) 神よ、 **潔 き 心 を我に造れ、正しき 靈 を我の衷に 改 め給え。**



った。 なんぢ かんばせ お なか なんぢ せいしん われ と あ なか なか なんぢ せいしん おれ と あ なか なか なが 我を 爾 の 顔 よりより逐うこと 毋れ、 爾 の聖 神を我より取り上ぐること 毋れ。





しょうしんぢょ なんぢ じつ ぶどう えだ われら ため いのち み むす もの ぢょさい なんち 生 神 女よ、爾 は實の葡萄の枝、我等の爲に生命の果を結びし者なり、女 宰よ、爾 いの せいしと とも わ たましい あわれみ こうむ に 祈る、聖 使徒と 共に我が 靈 の 憐 を 蒙 らんことを祈り給え。

しゅ ひび あが ほ かみ われら おもに お またわれら すく たま かみ われ 主は日日に 崇め讃めらる。神は 我 等に重荷を負わすれども、亦 我 等を 救 い給 う。神は 我 等の 為に 救 の神なり。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮 は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎょ しゅさい われら あやまち 至聖三者よ、我等を 憐 め。主よ、我等の罪を 潔 くせよ。主 宰よ、我等の 愆 を ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ 赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の 病 を癒し給え。 悉 く 爾 の名に因る。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ 主 憐 めよ、主 憐 めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

てんいませれらのなよ、願わくは「爾」の名は聖とせられ、「爾」の國は來り、「爾」の旨は天 に一行わるるが如く、地にも一行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に おいめ もの われらゆる でとし、おおこな われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に もの もの もれらゆる でとし、おおいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれ 債 ある者を我等免すが如く、我等の 債 を免し給え。我等を 誘 に 導 かず、猶 我 ら きょうあく より救い給え。

けだしくに けんのう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いっ よよ 司祭) 蓋 國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經)アミン。

こうえい ちち こ せいしん き **光 榮は父と子と聖 神に歸す、**

イイススよ、我等の 霊 の悶ゆる時、 速 にして 眞 なる 慰 を 爾 の諸 僕に與えたま、うれい ときわれら たましい とはなる かかれ、 過 の時 我等の 心 に遠ざかる勿れ、恒に たまな の時 我等の 霊 を離るる毋れ、 過 の時 我等の 心 に遠ざかる勿れ、恒に なからを 常り給え。我等に近づけ、在らざる 所 なき者よ、近づけよ、 恩 廣き者よ、常に なんぢ の使徒と偕に在るが如く、我等 爾 を恃む者と偕にし、我等に同一にして 爾 を歌い、 爾 が至聖の神を讃 榮せしめ給え。

った。 いっ よよ 今 も何時も世世に、アミン。

至 淨 なる 生 神 女よ、爾 はハリスティアニン等の憑恃と轉 達なり、避 所と 壊れざる はなり、弱れる者の為に風なき 湊 なり、讃 詠せらるる童 貞 女よ、爾 は息めざる祈禱 はて世を救う者なるを以て、我等をも記憶し給え。

 しゅあわれ
 しゅあれ
 しゅん
 しゅん
 しゅあれ
 しゅん
 しゅん

いづれ の日何の時にも、天にも地にも叩拜讃榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして義人を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して、萬の者を救に招くハリストス神よ、爾
しゅよ、親ら我が此の時の禱をも受け、我等の生命を爾の誠に向わしめ給え、我等
の 霊 を聖にし、體を潔くし、おもんばかりを訪くし、思を淨くし、我等を悉くの
うれいとやまいより救い、爾の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其 園に衞り
みかびからないとない。

「ないにんをあわれ、らいせいの論をも分して、萬の者を救に招くハリストス神よ、なんちの主ない。
の 霊 を聖にし、 きゅうけ、我等の生命を爾の 誠に向わしめ給え、我等
の 霊 を聖にし、 體を 潔くし、おもんばかりをおさくし、思を淨くし、我等を 悉くの
うれいとかざわいとやまいよりすべい、衛の聖なる天使を以て我等を環り、我等が其 園に衞り
みもび かれて、信の一なると 爾の近づき難き光 榮を悟るに至らせ給え、蓋 爾 は世世に
あが ほ 崇め讃めらる、アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ 主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

ペンプラン ならび さか みさお やぶ かみことば う じっ マルヴィムより 尊 く、セラフィムに 並 なく 榮 え、貞操を 壞 らずして 神 言 を生みし 實 の

しょうしんぢょ なんぢ あが ほ 生 神 女たる 爾 を崇め讃む。

しんぷ しゅ な もつ ふく くだ **神父よ、主の名を以て福を降せ。**

誦經)アミン。

【 聖エフレムの祝文 】

しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと こころ われ あた なか **司祭**) 主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵駕と、空 談の 情 を我に與うる勿れ。

 $_{\phi}$ さお $_{\phi}$ $_{\phi$

ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ 鳴呼、主 王 よ、我に我が罪を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、 蓋 爾 は世世に 崇 め讃めらる、アミン。

かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま 神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、 神よ我罪人を淨め給え、 神よ我罪人を淨め給え、 神よ我罪人を淨め給え、 神よ我罪人を淨め給え、 神よ我罪人を淨め給え、 神よ我罪人を淨め給え、 神よ我罪人を淨め給え、 神よ我罪人を淨め給え、 神なだごとのごころ おれ あた こころ おれなんじ にく あた たま あが に と、 謙 遜と、 忍耐と、 愛の情を我爾の僕に與え給え。鳴呼、主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜え、 蓋爾は世世に崇め讃めらる、アミン。

はないかみちちぜんのうしゃ しゅどくせい こ およ せいしん ゆいいち しんせい ゆいいち 主 宰 神 父 全 能 者、主 獨 生 の子イイススハリストス 及び 聖 神、惟 一 の神 性、惟 一 のうりょく われざいにん あわれ なんぢ し ところ ほう もつ われふとう ぼく すく たま けだし の 能 力 よ、我 罪 人を 憐 み、爾 が知る 所 の法を以て我不當の僕を救い給え、蓋 なんぢ よよ あが ほ 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

【 第六時課 】

【常例の聖詠】

きた われら おう かみ こうはい **涌經)來れ、我等の王・神に叩 拜せん。**

きた われら おう かみ こうはいふふく **來れ、ハリストス・我等の王・神に叩 拜俯伏せん。**

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく 水れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩 拜俯伏せん。

第53聖詠

神よ、爾の名を以て我を救い、爾の力を以て我を判き給え。神よ、我が禱を聽き、我が口の言を聆き納れ給え、蓋外人は起ちて我を攻め、強き者は我が靈を見む、かれらかみない。では、我が一方。視よ、神は我の援助なり、主は我が靈を固め給う。彼は我が敵に其惡を報いん、爾の真實を以て彼等を滅し給え。主よ、我心を盡して爾に祭を感げ、爾の名を讚め揚げん、其善なるを以てなり、蓋爾は我をも話

【 第54聖詠 】

かみよ、我が 禱 を酔き我が 願 より匿るる曲れ。我に耳を 傾 けて我に聽き給え、我はかなしみの中に 呻 い、敵の聲、不虔者の責に由りて握う、 蓋 彼等は不法を以て我を誣い、 怒 を以て我に仇す。我が 心 は我の衷に 慄 き、死の恐惶は我に及べり、驚懼とい、 怒 を以て我に仇す。我が 心 は我の衷に 慄 き、死の恐惶は我に及べり、驚懼と戦 慄とは我に臨み、恐惶は我を圍めり。我言えり、執か我に鴿の翼を予うるあらん、我飛び去りで安を獲ん、遠く離れて野に居らん、急ぎて旋風と暴風とを避けん。 主よ、かれも多が、 遺く離れて野に居らん、急ぎて旋風と暴風とを避けん。 主よ、かれも多が、 真 舌を分けよ、 蓋 我は暴虐と争競とを城邑の中に見る、彼等は 晝 夜 其しようえんの上を練る。其中に毒 惡と患難あり、残害は其中にあり、詭 許と証 騙とは、なりもまたを認い、我を謗る者は敵に非ず、敵ならば我之を忍ばん、我に高ぶる者は我が仇に非ず、仇ならば我之を避けん、 方のちまたを忍ばん、我に高ぶる者は我なが仇に非ず、仇ならば我之を避けん、 方のちまたを忍ばん、我に高ぶる者は我が仇に非ず、仇ならば我之を避けん、 方の 爾 曾て我と儔しき者、我の友、我の近き者たり、我と親しき 談 を為しし者、偕に神の宮に行きし者たり。願わくは死は等に至らん、願わくは彼等は生きながら地獄に降らん、惡事は其住所に、其間に在ればな

り。惟我神に籲ばん、主 乃 我を救わん。晩と朝と午に我祈りて呼ばん、彼 乃 我 の聲を聽かん、我が 靈 を我を攻むる者より平安に脱れしめん、彼等 夥 しければなり。かみ きき かん、世の前より在す者は彼等を卑くせん、蓋 彼等に 改 新 なし、彼等は神を畏れず、己 の手を彼等と和睦する者に伸べ、己 の約に背けり、其口は 膏 より滑らかにして、其 心 に仇を懷き、其 言 は 油 より柔らかにして、是れ白刃なり。 爾 の重任を主に負わしめよ、彼は 爾 を扶けん。彼は何時も義人に撼くを容さざらん。神よ、 爾 は彼 等を滅 の阱に 陥 れん、血を流し、 貳 を 行 う者は生きて其日の 半 にも至るを得ず。主よ、惟我 爾 を賴む。

【第90聖詠】

こうえい ちち と子と 聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神 よ光 榮は 爾 に歸す、 アリルイヤ、アリルイヤ、神 よ光 榮は 爾 に歸す、 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神 よ 光 榮 は 爾 に歸す、

プライスマ 【 指定された坐誦經(通常は省略) 】

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ 主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、



司祭) 神よ、我が 禱 を聆き、我が 願 より匿るる毋れ。





司祭) 我神に籲ばん、主 乃 我を救わん。



※ 三歌齋經を見る。

誦經)(※ 三歌齋經が指定する預言の讚詞)

司祭) 謹 みて聽くべし、

プロキメン <mark>誦經) 提 網、</mark> (三歌齋經が指定するプロキメン)

えいち **司祭)睿智、**

司祭) 謹 みて聽くべし、

誦經)(※ 三歌齋經が指定する箇所の預言書の讀み)

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮 は父 と子と 聖 神 に歸す、今 も何時も世世に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎょ 至聖三者よ、我等を 憐 め。主よ、我等の罪を 潔 くせよ。主 宰よ、我等の 愆 を ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ 赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の 病 を癒し給え。 悉 く 爾 の名に因る。

_{しゅあわれ} しゅあわれ しゅあわれ **主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、**

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮 は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

けだしくに けんのう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いっ よよ 司祭 蓋 國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經)アミン。

ハリストス神よ、爾 は地の中に 救 を 施 し、爾 が至 淨 の手を 十 字架に伸べて、主 こうえい なんぢ き よ ばんみん あつ たま よ、光 榮は 爾 に歸すと呼ぶ 萬 民 を集め給えり。 こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、

「ただしなんち は こうじん まろこび み たま 爾 は 衆 人を欣喜に滿て給えり。

いま いっ よよ 今 も何時も世世に、アミン。

- 月・火・木曜日) 慈憐の泉 なる 生 神 女よ、我等に 憐 を垂れ、罪なる人 人を 顧 みて、恒 でとびん なんち たま けだしわれら なんち たの てんぐんしゅ なら なんち の如く 爾 の 力 を 顯 し給え、蓋 我等は 爾 を恃み、天 軍 主ガウリイルに 傚いて 爾 に呼ぶ、慶 べよ。
- 水・金曜日) 讚 榮せらるる 生 神 童 貞 女よ、我等 爾 を歌う、蓋 爾 の子の 十 字架にて地 ごく やぶ られ、死は 亡 され、殺されし者は興きて生命を得、 古 に復りて地堂の福 樂を受けたり、故に我等ハリストス吾が神に感 謝して、其 權 能ありて 獨 仁慈なるを讚 榮す。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ 主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、

 ぁゕ゙゠ 崇 め讃めらる、アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ 主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

へルヴィムより 尊 く、セラフィムに 並 なく 榮 え、貞操を 壊 らずして 神 言 を生みし 實の しょうしんちょ なんぢ あが ほ 生 神 女たる 爾 を崇め讃む。

しんぷ しゅ な もつ ふく くだ 神父よ、主の名を以て福を降せ。

かみ われら おん こうむ われら ふく くだ なんぢ かんばせ もつ われら てら ならび 司祭)神よ、我等に恩を被らせ、我等に福を降し、爾が 顔 を以て我等を照し、並 に われら あわれ たま 我等を憐み給え。

誦經)アミン。

【 聖エフレムの祝文 】

司祭 主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵駕と、空 談の 情 を我に與うる勿れ。

みさお へりくだり こらえ あい こころ われなんじ ぼく あた たま 貞操と、謙 遜 と、忍耐と、愛の情 を我 爾 の僕に與え給え。

あぁ しゅおう われ ね つみ み ね けいてい ぎ 鳴呼、主 王 よ、我に我が罪 を見、我が兄 弟 を議せざるを賜 え、 蓋 爾 は世世に 崇 め讃めらる、アミン。

かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま 神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、 きょ たま かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま まま たま かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま たま かみ われざいにん きょ たま たま かみ かれざいにん きょ たま たま かみ われざいにん きょ たま たま かみ われざいにん きょ たま たま かか はたこと かり はたり こころ かれなんじ ぼく あた たま あが は と、 謙 遜 と、 忍耐と、 愛の情 を我 爾 の僕に 與え給え。鳴呼、主 王よ、我に我が罪を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、 蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

※九時課の「來れ、我等の王・・・」に続く。